

二〇〇四年七月一八日

福音の奥義を

エペソ人への手紙第六章一八節～二〇節

これまで、エペソ人への手紙第六章一八節に記されています、

すべての祈りと願いを用いて、どんなときにも御霊によつて祈りなさい。

そのためには絶えず目をさましていて、すべての聖徒のために、忍耐の限りを尽くし、また祈りなさい。

という戒めについてお話ししてきました。それに続く一九節、二〇節には、

また、私が口を開くとき、語るべきことばが与えられ、福音の奥義を大胆に知らせることができるように私のためにも祈ってください。私は鎖につながれて、福音のために大使の役を果たしています。鎖につながれていても、語るべきことを大胆に語れるように、祈ってください。と記されています。

ギリシャ語の原文では、一九節にも二〇節にも、「祈ってください」ということばはありません。ただ、一九節の初めにおいて「そして、私のために」と言われていて、その後、祈るべき内容に当たることが記されています。それで、新改訳は、そのほかの訳もそうですが、「祈ってください」ということばを補っています。ここに「祈ってください」ということばがなくて、ただ一九節の初めで「そして、私のために」と言われているだけであることによつて、これがその前の一八節で、

そのためには絶えず目をさましていて、すべての聖徒のために、忍耐の限りを尽くし、また祈りなさい。

と言われていることにつながっていることが、よりはっきりと分かるようになっていきます。

パウロは、エペソ人への手紙の読者たちである小アジアのクリスチャンたちが「すべての聖徒のために」心を砕いていることを知っていました。一章一五節、一六節には、

こういうわけで、私は主イエスに対するあなたがたの信仰と、すべての聖徒に対する愛とを聞いて、あなたがたのために絶えず感謝をささげ、あな

たがたのことを覚えて祈っています。

と記されています。ですから、六章一八節で、

そのためには絶えず目をさましていて、すべての聖徒のために、忍耐の限りを尽くし、また祈りなさい。

と言われているのは、エペソ人への手紙の読者たちがまだしていないことをするようにと戒めているのではなく、すでにそうしていることをさらに励ましているわけです。その際に、このパウロのことばの中心は「目をさましていて」ということにありますから、目を覚ましていることの大切さを強調しています。そして、その「すべての聖徒のために」目を覚まして祈り続けることの中に、自分の働きのための祈りを加えてくれるようにと願っているのです。

その祈りの内容として一九節に記されていることは、

私が口を開くとき、語るべきことばが与えられ、福音の奥義を大胆に知らせることができるように

ということですが、この部分の訳し方については、いろいろな意見があるようですが、ほぼこの新改訳の訳文でいいのではないかと思われれます。ただ、

私が口を開くとき、語るべきことばが与えられ、
という部分は、

私が口を開くときに、ことばが与えられるように、
ということ、「語るべき」ということは原文にはありません。

ここでパウロがエペソ人への手紙の読者たちに

私が口を開くときに、ことばが与えられるように、

と、自分のために祈ってくれるように要請しているのは、自分が主からみことばを委ねられていることを自覚しているからです。具体的には、パウロは「福音の奥義を知らせる」ことのために召されていることを自覚しています。その務めは、自分の考えを述べたり、自分自身を売り込むことによつては成し遂げられません。主から委ねられた「福音の奥義を知らせる」という務めを果たすためには、主が委ねてくださった「ことば」を語らなければなりません。それで、主がふさわしいことばを与えてくださるように、パウロ自身が祈るとともに、エペソ人への手紙の読者たちにも祈を要請しているわけです。エペソ人への手紙の読者たちは、「すべての聖徒のために」目を覚まして祈り続ける中で、そのようにパウロのために祈ることによつて、パウロの「福音の奥義を知らせる」務めに参与することになります。

このエペソ人への手紙六章一九節、二〇節に記されていることと同じことは、エペソ人への手紙と同じ状況で記されたと考えられるコロサイ人への手紙の四章三節、四節にも記されています。そこでは、

同時に、私たちのためにも、神がみことばのために門を開いてくださって、私たちがキリストの奥義を語れるように、祈ってください。この奥義のために、私は牢に入れられています。また、私がこの奥義を、当然語るべき語り方で、はっきり語れるように、祈ってください。

と言われています。このコロサイ人への手紙四章でも、その前の二節において、目をさまして、感謝をもって、たゆみなく祈りなさい。

と記されています。三節、四節に記されていることは、やはり、祈りにいて目を覚ましていることとつながっています。

ここでも、パウロは自分に委ねられた使命が「キリストの奥義を語る」ことにあると述べています。そのために、コロサイ人への手紙の読者たちが目を覚まして祈り続けるときに、自分たちのために祈ってくれるようにと要請しています。

これらのことから、エペソ人への手紙の読者たちやコロサイ人への手紙の読者たちが目を覚まして祈り続ける祈りにいて、パウロが主から自分に委ねられている「福音の奥義を知らせる」こと、あるいは「キリストの奥義を語る」ことのために祈ってもらいたいと願っていることが分かります。このことから、さらに、目を覚まして祈り続けることと、「福音の奥義を知らせる」ことのために祈ること、あるいは「キリストの奥義を語る」ことのために祈ることのつながりを考えてみたいと思います。

すでにお話ししましたように、聖書において目を覚ましているように戒められているときの目を覚ましていることは、「主の日」、「主の時」、特に、栄光のキリストの再臨の日をわかまえることから生まれてくる姿勢です。それは、その日がいっであるかをわかまえることではなく、父なる神さまがご自身の永遠の聖定において、私たちの救いの完成のために「主の日」、すなわちイエス・キリストの再臨の日を定めてくださっているということを信じて、その日を待ち望む望みのうちに地上の歩みを歩むことに現れてきます。

エペソ人への手紙一章三節～六節に、

私たちの主イエス・キリストの父なる神がほめたたえられますように。神

はキリストにおいて、天にあるすべての霊的祝福をもって私たちを祝福してくださいました。すなわち、神は私たちを世界の基の置かれる前からキリストのうちに選び、御前で聖く、傷のない者にしようとされました。神は、ただみこころのままに、私たちをイエス・キリストによってご自分の子にしようと、愛をもってあらかじめ定めておられたのです。それは、神がその愛する方によって私たちに与えてくださった恵みの栄光が、ほめたたえられるためです。

と記されていますように、父なる神さまは永遠の聖定において、私たちを「御前で聖く、傷のない者」とし、「イエス・キリストによってご自分の子にしようと」定めてくださっています。

*

父なる神さまは、このことを実現して下さるために、御子イエス・キリストを、私たちのための贖い主としてお遣わしになりました。イエス・キリストは私たちの罪の咎を背負って十字架にかかって死んでくださり、私たちの罪を贖ってくださいました。そして、私たちと一つとなってくださいました私たちの契約のかしらとして、死者の中からよみがえってください、私たちのいのちの源となってくださいました。さらに、天に上って父なる神さまの右の座に着座され、そこから、御霊を遣わしてくださいました。御霊は御子イエス・キリストが成し遂げられた贖いの御業を私たちに当てはめてくださって、私たちの罪をきよめ、私たちをイエス・キリストの復活のいのちによって生かしてください、私たちを新しく生まれた者、新しく造られた者としてくださいました。

コリント人への手紙第二・五章一七節には、

だれでもキリストのうちにあるなら、その人は新しく造られた者です。古いものは過ぎ去って、見よ、すべてが新しくなりました。と記されています。

これは、ただ単に私たちの心構えが変わったということだけのことではありません。また、私たちの考え方が変わったというだけのことでもありません。私たちが、世の終わりのイエス・キリストの再臨の日に、イエス・キリストによって再創造される新しい天と新しい地にふさわしい存在として、新しく造られているということの意味しています。世の終わりに再臨されるイエス・キリストが再創造される新しい天と新しい地は、今私たちが住んでいる天と地をご破算にして、再び何もない中から造られるではありません。最初の創造の御業に

よって造り出されて、神のかたちには造られている人間の罪による堕落のために虚無に服しているこの天と地が、御子イエス・キリストの贖いの御業にあずかって本来の姿に回復されるばかりか、主の充滿な栄光のご臨在の場としてふさわしく再創造されるのです。イエス・キリストの再臨の日によりみがえる私たちが私たちであることは変わりがないように、新しい天と新しい地が、最初の創造の御業によって造り出された天と地であることには変わりがありません。

新しい天と新しい地においては、主であられるイエス・キリストが、その充滿な栄光のうちにご臨在されます。そして、イエス・キリストにあつて父なる神さまが私たちの間にご臨在されます。私たちは、栄光のキリストの御霊に満たされて、御子イエス・キリストにある父なる神さまとの愛にあるいのちの交わりのうちに生きるようになります。私たちがイエス・キリストの復活のいのちにあずかつて新しく造られ、新しく生まれているということは、そのような、新しい天と新しい地において生きる者として、新しく造られ、新しく生まれているということの意味しています。このことは、イエス・キリストにあつて私たちの現実となっています。

このことの土台は私たちのうちにはなく、父なる神さまが御子イエス・キリストをとおして成し遂げてくださったことにあります。父なる神さまはすでに御子イエス・キリストの十字架の死によって、私たちの罪のために贖いの御業を成し遂げてくださっています。そして、御子イエス・キリストに栄光をお与えになつて、イエス・キリストを死者の中からよみがえらせてくださつて、ご自身の右の座に着座させてくださいました。それで、御子イエス・キリストは、父なる神さまからお受けになった御霊を私たちに注いでくださいました。これらすべてのことは、父なる神さまが御子イエス・キリストにあつて私たちのために成し遂げてくださったことですが、私たちの外で、今から二千年前になされたものです。これが、私たちがより頼むべき土台です。

父なる神さまはこのすべてを福音のみことばを通して私たちに明らかにしてくださいます。私たちは、父なる神さまが福音のみことばを通して明らかにしてくださいました、私たちの贖い主であるイエス・キリストと、イエス・キリストによって成し遂げられた贖いの御業を信じています。

このように、父なる神さまが御子イエス・キリストを遣わしてくださいましたこと、イエス・キリストが十字架にかかつて死んでくださり、死者の中からよみがえってくださいましたこと、そして、イエス・キリストが父なる神さまの右の座

から御霊を遣わしてくださったことは、今から二千年前に成し遂げられてい
ます。

その後の歴史においては、イエス・キリストが父なる神さまの御名によつて
遣わされた御霊が、イエス・キリストの御国の民の間に宿ってくださって、す
でにイエス・キリストが成し遂げてくださっている贖いを、イエス・キリスト
の御国の民に当てはめるお働きをしてくださっています。

私たちも、その御霊のお働きによつて心を開いていただき、福音のみことば
にあかしされているイエス・キリストとイエス・キリストの贖いの御業を信じ
るようになりました。それで、私たちはイエス・キリストを信じる信仰によつ
て義と認められ、父なる神さまの子どもとしての身分を与えられ、実際に、御
霊によつて「アバ、父。」と呼ぶことによる、父なる神さまとの愛にあるいの
ちの交わりの中に生きています。

*

これは、先ほど言いましたように、私たちが、主がその充滿な栄光において
ご臨在される新しい天と新しい地において生きる者として、新しく造り変えら
れ、新しく生まれていることを意味しています。ですから、私たちが新しく造
り変えられて、新しく生まれていることは、イエス・キリストの再臨の日に、
この古い天と古い地が造り変えられて、新しい天と新しい地となることにつな
がっており、古い天と古い地が造り変えられて、新しい天と新しい地となるこ
との先駆けとしての意味をもっています。それで、いろいろな機会にお話しし
てきましたが、ローマ人への手紙八章一八節〜二二節には、

今の時のいろいろの苦しみは、将来私たちに啓示されようとしている栄光
に比べれば、取るに足りないものと私は考えます。被造物も、切実な思い
で神の子どもたちの現われを待ち望んでいます。それは、被造物が虚
無に服したのが自分の意志ではなく、服従させた方によるのであって、望
みがあるからです。被造物自体も、滅びの束縛から解放され、神の子ども
たちの栄光の自由の中に入れられます。私たちは、被造物全体が今に至る
まで、ともにうめきともに産みの苦しみをしていることを知っています。
と記されているのです。

御霊のお働きによつて新しく造り変えられ、新しく生まれた私たちが、福音
のみことばによつてあかしされているイエス・キリストとイエス・キリストが
成し遂げてくださった贖いの御業を信じて義と認められ、父なる神さまの子ど

もとされていることは、ここに、

被造物も、切実な思いで神の子どもたちの現われを待ち望んでいるのです。と言われている、「被造物の望み」が、歴史の中に実現していることを意味しています。

しかし、

私たちは、被造物全体が今に至るまで、ともにうめきともに産みの苦しみをしていることを知っています。

と言われていますように、栄光の主がその充満な栄光のうちにご臨在される新しい天と新しい地は、いまだ歴史の現実とはなっていない。それは、贖いの御業のご計画を立てておられる父なる神さまが定めておられる、世の終わりのイエス・キリストの再臨の日に、再び来られるイエス・キリストの再創造の御業をおして実現します。

ですから、

被造物全体が今に至るまで、ともにうめきともに産みの苦しみをしていると言われているのです。しかし、これは単なる希望的観測ではありません。

「産みの苦しみをしている」ということは、その誕生が確実なことであり、迫ってきているということを意味しています。ですから私たちは、目を覚ましていて、その日、その時を待ち望んでいるのです。

その時には、私たちの死すべきからだも新しく造り変えられて、栄光のからだによみがえります。それで、続く二三節では、

そればかりでなく、御霊の初穂をいただいている私たち自身も、心の中でうめきながら、子にしていたくこと、すなわち、私たちのからだの贖われることを待ち望んでいます。

と言われています。

私たちの死すべきからだが新しく造り変えられて、栄光のからだによみがえるということは、主の充満な栄光のご臨在の御前に立つのにふさわしい、栄光のからだによみがえることです。それとともに、同じイエス・キリストの再創造のお働きによつて、古い天と古い地も新しい天と新しい地に造り変えられます。

*

繰り返しになりますが、これらすべてのことの土台は、人となって来られた永遠の神の御子イエス・キリストの十字架の死と死者の中からのよみがえりに

よって成し遂げられた罪の贖いです。イエス・キリストの十字架の死と死者の中からのよみがえりが、私たちだけでなく、全被造物にとって意味をもっているということは、コロサイ人への手紙一章一九節、二〇節に示されています。そこには、

なぜなら、神はみこころによって、満ち満ちた神の本質を御子のうちに宿らせ、その十字架の血によって平和をつくり、御子によって万物を、ご自分と和解させてくださったからです。地にあるものも天にあるものも、ただ御子によって和解させてくださったのです。

と記されています。

このように、イエス・キリストの十字架の死と死者の中からのよみがえりによって成し遂げられた贖いの御業は、父なる神さまが「御子によって万物を、ご自分と和解させてくださった」ことの根拠となっています。

エペソ人への手紙一章七節～一〇節には、父なる神さまが「御子によって万物を、ご自分と和解させてくださった」ことが、父なる神さまの「みこころの奥義」であるということが明らかにされています。そこには、

私たちは、この御子のうちにあつて、御子の血による贖い、すなわち罪の赦しを受けているのです。これは神の豊かな恵みによることです。神はこの恵みを私たちの上にあふれさせ、あらゆる知恵と思慮深さをもって、みこころの奥義を私たちに知らせてくださいました。それは、神が御子においてあらかじめお立てになったご計画によることであつて、時がついに満ちて、この時のためのみこころが実行に移され、天にあるものも地にあるものも、いつさいのものが、キリストにあつて一つに集められることなのです。

と記されています。

六章一九節において、パウロが主から委ねられた「福音の奥義を大胆に知らせることができるよう」に「と願っているときの「福音の奥義」は、この父なる神さまの「みこころの奥義」のことです。それは、具体的には、

天にあるものも地にあるものも、いつさいのものが、キリストにあつて一つに集められること

です。それは、先程のコロサイ人への手紙一章一九節、二〇節において、

なぜなら、神はみこころによって、満ち満ちた神の本質を御子のうちに宿らせ、その十字架の血によって平和をつくり、御子によって万物を、ご自

分と和解させてくださったからです。地にあるものも天にあるものも、ただ御子によって和解させてくださったのです。

と言われていますように、イエス・キリストの十字架の死によって成し遂げられた贖いの御業を通して実現しています。

けれどもこのことの最終的な完成は、世の終わりのイエス・キリストの再臨の日まで待たなければなりません。そして、私たちは、父なる神さまの永遠の聖定におけるみこころにおいて定められているその日を、待ち望んでいます。それで、私たちは目を覚ましていて、御霊によって祈り続けます。その祈りの中で、特に、「すべての聖徒のために」目を覚ましていて、忍耐深く祈り続けます。それは、先ほど引用しましたローマ人への手紙八章一九節に、

被造物も、切実な思いで神の子どもたちの現われを待ち望んでいます。

と記されていますように、

天にあるものも地にあるものも、いつさいのものが、キリストにあって一つに集められること

という、父なる神さまの「みこころの奥義」は、神の子どもたちが御子イエス・キリストにあって一つに集められることから始まるからです。そして、そのことは、すでに始まっています。エペソ人への手紙三章三節～六節には、

先に簡単に書いたとおり、この奥義は、啓示によって私に知らされたのです。それを読めば、私がキリストの奥義をどう理解しているかがよくわかるはずです。この奥義は、今は、御霊によって、キリストの聖なる使徒たちと預言者たちに啓示されていますが、前の時代には、今と同じようには人々に知らされていませんでした。その奥義とは、福音により、キリスト・イエスにあって、異邦人もまた共同の相続者となり、ともに一つのからだに連なり、ともに約束にあずかる者となるということです。

と記されています。

私たちが福音のみことばによってあかしされているイエス・キリストとイエス・キリストによって成し遂げられた贖いの御業を信じていることは、異邦人である私たちがユダヤ人と「共同の相続者となり、ともに一つのからだに連なり、ともに約束にあずかる者」となっているということです。

この世では民族や文化の間に様々な違いがあります。その違いを造り主である神さまとの関係で見ますと、贖い主の約束を受け継いできたユダヤ人と、その約束を知らされていなかった異邦人の間には決定的な違いがありました。け

れども、それは古い契約の下でのことでした。ユダヤ人は古い契約の下で、やがて来るべきものの「地上的なひな型」を委ねられていました。その地上的なひな型の本体は、一つの民族に限られた救いではなく、あらゆる民族と文化に属する者を救うことができる救いをもたらすものでした。それで、新しい契約の下にある私たちは、あらゆる民族や文化の違いという壁を越えて、イエス・キリストにある者として一つに結ばれています。そのことが、

天にあるものも地にあるものも、いっさいのものが、キリストにあつて一つに集められること

という、父なる神さまの「みこころの奥義」の実現の第一歩です。私たちはそのようなものとして、「すべての聖徒のために」目を覚ましていて、忍耐深く祈り続けます。

今この時に、様々な形の迫害による試練と患難の中で苦しんでいる聖徒たちは実に多くいらつしゃいます。また、私たち自身のうちにはなおも罪の腐敗と暗やみが残っています。それで、私たちは罪を犯してしまい、主のみこころに背き、御霊を悲しませてしまいます。私たちはそのような現実の中でうめきながらも、目を覚ましていて、「すべての聖徒のために」祈り続けなければなりません。ローマ人への手紙八章二二節では、

私たちは、被造物全体が今に至るまで、ともにうめきともに産みの苦しみをしていることを知っています。

とされています。その「被造物全体」のうめきの中心に、神の子どもたちのうめきがあるのです。しかし、先ほど言いましたように、それは絶望のうめきではありません。このうめきは「ともに産みの苦しみをしていること」を意味しています。そうであるからこそ、私たちは、世の終わりのイエス・キリストの再臨の日には、父なる神さまの「みこころの奥義」が実現するということをおぼえて、目を覚まして「すべての聖徒のために」祈り続けるのです。

*

エペソ人への手紙六章一九節において、パウロが、

また、私が口を開くとき、語るべきことばが与えられ、福音の奥義を大胆に知らせることができるよう私のためにも祈ってください。

と言って、エペソ人への手紙の読者たちが目を覚まして「すべての聖徒のために」祈り続ける祈りの中で、自分の働きのためにもいることを求めているのは、パウロの個人的な成功を求めてのことではありません。そうではなく、世の終

わりのイエス・キリストの再臨の日に父なる神さまの「みこころの奥義」が完全な形で実現することになることを待ち望んでのことです。そして、世の終わりのイエス・キリストの再臨の日に父なる神さまの「みこころの奥義」が完全な形で実現することになることを待ち望むことにおいて、パウロとエペソ人への手紙の読者たちが一致しているからです。

このことのうちに神の子どもたちの祈りの特徴があります。私たちはもちろん、自分たちの個人的な必要のために祈ります。「主の祈り」において、イエス・キリストは、

私たちの日ごとの糧をきょうもお与えください。

と祈りなさいと教えてくださっています。しかし、それに先立って、

御国が来ますように。

みこころが天で行なわれるように地でも行なわれますように。

と祈るようにとも教えてくださっています。世の終わりのイエス・キリストの再臨の日に父なる神さまの「みこころの奥義」が完全な形で実現することになることを待ち望むことの中で、目を覚まして祈る祈りです。

それは私たちにも当てはまります。私たちも、「被造物全体」のうめきの中にいる神の子どもとして、みこころの約束にしたがって、世の終わりのイエス・キリストの再臨の日に父なる神さまの「みこころの奥義」が完全な形で実現することになることを待ち望んでいます。それで、私たちは、目を覚まして「すべての聖徒のために」祈り続けます。そして、自分たちもそのように祈っていたいただいていることを信じて、ますます、世の終わりのイエス・キリストの再臨の日に父なる神さまの「みこころの奥義」が完全な形で実現することになることを待ち望む者みつつ、主の御前を歩むようになります。